乳がん見つけにくい 高濃度乳房

超音波・MRIにも注目

マンモ検診は見分け難しく

専門医に最新検査方法聞く

がんの中で女性が最もかかりやすい乳がん。検査の基本は国が推奨するマンモグラフィー（乳房エックス線撮影）だが、乳腺の多い「高濃度乳房」は、がんが見つかりにくいことが課題となっている。どう対応すればよいのだろう。最近注目されるようになってきた他の検査方法なども含め、専門医に聞いた。（鈴木大介）

マンモグラフィーで見た乳腺組織の画像

（NPO法人乳がん画像診断ネットワーク提供）

乳がんの検査の特徴

- マンモグラフィー
  - 早期がんを発見できる
  - 高濃度乳房では、がんを見つけにくい
  - 痛みがある
  - 微量の放射線被曝がある
- 超音波
  - 痛みを感じない
  - 高濃度乳房でもしこりを見つけやすい
  - 良性のしこりも見つけてしまう
- MRI
  - 痛みを感じない
  - 感度がよく、高濃度乳房でも発見率が高い
  - 金属やペースメーカーが体内にある人はできないことがある

課題

広島大病院（広島市南区）乳腺外科の角舎学行医師によると、乳房は主に、母乳を作る乳腺と脂肪でできており、人によって割合は異なる。若い人ほど乳腺が多いという。「高濃度乳房」とは、乳腺の割合が大半を占める場合をいう。

「高濃度」そのものは病気ではない。問題は、マンモによる検診では高濃度の4、5割で、がんかどうかを見分けられないという報告がある点だ。マンモの画像では、脂肪は黒く写る一方、乳腺も腫瘍も同じように白く写る。高濃度の場合は、乳房全体が白く写ってしまう。しかも、乳腺の濃度が上がるほど、がんの発生リスクが高まるという。

マンモは、受診率が低いのも難点だ。国は40歳以上の女性に2年に1回受けるよう勧めており、自治体によって無料か少額の自己負担で受けられる。しかし、広島県では、2016年の40～69歳の受診率は4割にとどまる。検査時に乳房を板状の器具で挟むため圧迫して痛みを伴うことや、乳房を他人に見られるのが苦痛で、避ける人もいる。

「高濃度乳房と分かって不安があれば、専門医に相談を」と呼び掛ける角舎医師（広島市南区）

厚生労働省の有識者検討会でも昨年から、高濃度乳房への対応がテーマに上っている。マンモ検診の結果「異常なし」であっても、高濃度の場合はがんを見落とすリスクが増えることなどを伝えるかどうかー。伝える自治体も既に1割以上ある。一方で日本乳癌（がん）検診学会などは、高濃度の人への有効な検査法が確立されていないため、「高濃度乳房かどうかを一律に知らせることは時期尚早」とする。

対応策

遺伝リスクある人 検討を

マンモグラフィーによる検査の課題を補うと期待されるのが、超音波（エコー）検査だ。乳腺が高濃度の場合も見つけやすく、痛みもない。40代女性を対象にした全国規模の調査では、超音波を併用すると発見率が高まる結果が出ている。乳腺クリニックなど多くの医療機関で受けることができる。ただ、今のところ死亡率を下げる効果は確かめられていないため、自治体検診でも費用は全額自己負担が基本で、数千円かかる。

「MRIを用いた新たな手法は今後、乳がん検診で大きな役割を果たせるはずだ」と語る高原教授（広島市中区）

磁気共鳴画像装置（MRI）も、もう一つの選択肢として注目されている。これまでは、検診ではなく精密検査の段階で活用されてきた。そんな中、放射線科医で東海大工学部の高原太郎教授は、検診からMRIを用いる「ドゥイブス法」と呼ばれる特殊な画像診断を提唱する。

高原教授は先月広島市であった市民向けの講座でもドゥイブス法について紹介した。乳腺濃度に関わらず質の高い画像が得られ、超音波と比べてもがんを見分ける感度が高いという。MRIで通常使う造影剤を用いない方法で、副作用の心配がないそうだ。

日本乳癌検診学会の13年のガイドラインでは、安定した臨床データが乏しく、まだ科学的に効果が証明されていないとしてドゥイブス法は推奨されていない。高原教授は「厚労省の基準を大幅に上回る発見率を得られている。将来的に超音波とともに任意検診の一翼を担える」と強調する。

ただ、この方法の検査は全国でもまだ数カ所でしか実施されていない。広島県内では広島平和クリニック（広島市中区）が2月に初めて導入したばかりで利用者はまだ少ない。2、3万円の費用がかかる。

高濃度乳房のうち、こうしたマンモ以外の検査に適するのはどんなケースか。広島大病院の角舎医師は「家族や親戚に乳がんの人がいるなど、遺伝性のがんのリスクのある人は、30代から超音波を受けるのもいい」と助言する。「自分のリスクを知り、医療機関で検査のメリットやデメリットの説明を受けて冷静に対応することが大切です」と語る。